

# バキチの仕事

宮沢賢治

青空文庫



「ああそうですか、バキチをご存ぞんじなんですか。」

「知ってますとも、知ってますよ。」

「バキチをご存じなんですか。」

小学校でいっしょ一緒ですか、中学校でいっしょ一緒ですか。いいやあいつは中学校など入りやしない。やっぱり小学校ですか。「兵へ隊たいで一緒です。」

「ああ兵隊で、そうですか、あいつもいっとうそつ一等卒でさね、どうやってるかご存じですか。」「さあ知りません。隊で分れたきりですから。」

「ああ、そうですか、そいじや私のほうがやっぱりくわ詳しく知って

ます。この間まで馬喰ばくろうをやつてましたがね。今ごろは何をして  
いるか全く困こまつたもんですよ。」

「どうして馬喰をやめたでしょう。」

「だめでさあ、わつしもずいぶん目をかけました。でもどうして  
もだめなんです。あいつは隊をさがつてからもとの大工だいくにならな  
いで巡査じゆんさを志願しがんしたのです。」  
「そして巡査じゆんさをやつたんです  
か。」

「それあやりました。けれども間もなくやめたんです。」

「どうしてやめたんだらうなあ、何でも隊たいに来る前は、大工でと  
にかく暮くらしていたと云いうんですが。」

「それやうでさあ大工もほんのちよつとです。土方どかたをやめてな

ったんです。その土方もまたちよつとです。それから前は知りま  
 せん。土方ばかりじゃありません、あめや 飴屋もやつたて云いいますよ。」  
 「巡査をどうしてやめたんです。」「あんな巡査じゃだめでさあ、  
 あのお神しんめい明さんの池ね、あすこに鯉こいが居いるでしょう、県の規則きそく  
 で誰だれにもとらせないんです。ところが、やつぱり夜のうちに、こ  
 つそり行くものがあるんです。それあきつとよく捕とれるんでしょ  
 う。バキチはそれをきいたのです。毎まい晩ばんお神明さんの、杉すぎのう  
 しろにかくれていて、来るやつを見ていたそうです、そしていよ  
 いよ網あみを入れて鯉こいが十疋びきもとれたとき、誰だつこらつて出るんで  
 しょう、魚も網あみも置おいたまま一いち目散もくさんに逃にげるでしょうバキチは  
 笑わらつてそいつもを持って警けい察さつの小使室こづかいしつへ帰かえるんです。「変へんだ

ねえ、なるほどねえ。」「何でも五回か六回かそんなことがあつたそうです。そしたらある日 署 長しよちようのところへ差出人さしだしにんの名の書いてない変な手紙が行つたんです。署長が見たら今のことでしよう、けれども 署 長しよちようは笑つてました。なぜつて 巡 査じゆんさなんてものは 実際 月 給じつさい げつきゆうも 僅わずかですしね、くらしに 困こまるものなんです。」

「なるほどねえ、そりやそうだねえ。」

「ところがねえ、次つぎが大へんなんですよ、 耕 牧 舎こうぼくしゃの 飼 牛かううしがね、 結 核けっかくにかかつていたんですがある日とうとう死しんだんです。ところが 病 氣びようきのけだものは死んだら棄すてなくちやいけないでしよう。けれども何せ売れば二、三百にはなるんです。誰だれだつて惜おしいとは思いません。耕牧舎でもこつそりそれを売っているらしいと

いうんです。行って見て来いってうわけでバキチが劍けんをがちやつかせ、耕牧舎へやって来たでしょう。耕牧舎でもじっさい困こまつてしまったのです。バキチが入って行きましたらいきなり一疋びきの牛を叩たたいてあばれさせました。牛もびっくりしましたね、いきなり外に飛とび出してバキチに突ついてかかったんです。

バキチはすつかりまごついて一いち目散もくさんに警けい察さつへ遁にげて帰ったんです。そして署長のところへ行って耕牧舎では牛の皮かわだけはいで肉と骨ほねはたしかに土に埋うめていましたって報ほう告こくしたんです。ところがそれが知れたでしょう。

町のものもみんな笑わらいました。署長もすつかり怒おこつてしまいいある朝役所やくしよへ出るとすぐいきなりバキチを呼よび出して斯こう申もうし渡わた

したと云います。バキチ、きさまもだめなやつだ、よくよくだめなやつなんだ。もう少し見みどころ所があると思つたのに牛につつかかれたくらいで職務しよくむも忘れて遁わすげらるなんてもう今日きょう限り免官めんかんだ。すぐ服ふくをぬげ。と来たでしょう。バキチのほうでももう大たい抵い巡査じゆんさがあきていたんです。へえ、そうですか、やめましょう。永ながなが々お世話せわになりましたつて斯こう云いうんです。そしてすぐ服をぬいだはいいんですが実じつはみじめなもんでした。着物きものもシャツとズボンととずぼんだだけ、もちろん財布さいふもありません。小使室こつかいしつから出されては寝やすむ家さえないんです。その昼間のうちはシャツとズボン下だけで頭をかかえて一日小使室に居いましたが夜になつてからとうとう警部補けいぶほにたたき出されてしまいました。バキチはすっかり



悄気切しよげきつてぶらぶら町を歩きまわつてとうとう夜中の十二時に夕  
 スケの厩うまやにもぐり込こんだつて云うんです。

馬もびつくりしましたあね、（おいどいつだい、何の用だい。）  
 おどおどしながらはね起きて身みがま構えをして斯こうバキチに訊きいたつ  
 てんです。

（誰だれでもないよ、バキチだよ、もと巡査だよ、知らんかい。）バ  
 キチが横木よこぎの下の所ところで腹はらば這いのまま云いました。（さあ、知らな  
 いよ、バキチだなんて。おれは一向いっこう知らないよ。）と馬が云い  
 ました。「馬がそう云つたんですか。」「馬がそう云つたそう  
 ですよ。わつしや馬から聞きやした。（おい、情なさけないこと云う  
 じゃないか、おいらはひどく餓うえてんだ。ちつとオートでも振ふる

舞えよ。」ところがタスケの馬も馬でさあ、面白がつてオペラのようにふしをつけて（なかなかやれないわたしのオート。）だなんてやったもんです。バキチもそこはのんきです。やつぱりふしをつけながら、（お呉れよ、お呉れよ、お前のオートわたしにお呉れよ。）とうなっていました。そこへ丁度わたしが通りかかりました。おい、おい、バキチ、あんまりみつともないさまはよせよ。一体馬を盗もうつてのか。

それとも宿がなくなつて今夜一晩とめてもらいたいと云うのか。バキチが頭を搔きやした。いやどつちもだ、けれども馬を盗むよりとまるよりまず第一に、おれは何かが食いたいんだ。

（以下原稿空白）





# 青空文庫情報

底本：「ポラーノの広場」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年6月25日初版発行

底本の親本：「新校本 宮澤賢治全集」筑摩書房

1995（平成7）年5月

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2009年8月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# バキチの仕事

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>